
エンデミック

京谷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エンデミック

【Nコード】

N2801BA

【作者名】

京谷

【あらすじ】

ある田舎町の崩壊していく様をとある青年の目線で描いた物語が今始まる・・・

（前書き）

どうもー京谷です。

普段はパンデミックという小説を書かせていただいているんですが、今回はちょっとした息抜きも兼ねて短編を投稿させていただきました。

ですが、この作品は僕が一番初めに描いた作品なので今以上にいろいろとおかしいです^^;

この間にパンデミックのほうのストックをためておこうと思うんでどうか我慢してください。

あと、いずれこのエンデミックも連載したいと思っているんで改善点などお願いします。（自分で見えていても大量に改善点は見つけられませんでした^^;）

それとパンデミックのほうにもどんどん感想・評価付けのほうをお願いします。

よりよい作品を作り上げるには皆さんの声が必要なのです！

ということで前書きがここまで長くなったのは初めてですが、ごゆっくりお読みください。（マジでいろいろとおかしいと思います）

ここは、人口約5000人、周りは山か田んぼに囲まれているのかな町。

学校は小・中・高と一つずつしかなく、生徒数も少ない。

これといった特産品もなく、必要最低限の物しかない町である。これは、その町で起きた物語……

少年は一人で歩いていた

「あゝ疲れたあー。早く家に帰って飯でも食うか。」

少年の名は、笹塚 京谷。

若さあふれる高校一年生である。

彼がひとりで歩いているのはボッチだからというわけではない。仲のいい友達は全員京谷とは違う方向に家があるのだ。

小学生のころは幼馴染の女子と帰ったりしていたものだが、年頃の女子を「一緒に帰ろう。」と誘うのは気が引ける。

というわけで京谷は帰る時だけはどうしてもボッチになるのだ。

「今何時だ？」

携帯を取り出し液晶画面を覗き込む。

時刻は午前11時48分

時間を確認して携帯をポケットにしまいこんだときだった

「ザ・ザ・ザザー……ピンポンパンポーン」

「ん？」

「こちらは町会放送です。今日午後一時より、サイレンのテストを行いますので、非常のものと間違えないようにしてください。繰り返しします………」

「珍しいなあ。この時期にだなんて……」

京谷の住む町では定期的に非常用サイレンの動作チェックのためにサイレンを鳴らすのだ。

サイレンを鳴らす周期は決まっていて、大体一か月ごとに行うのだが、

今回はまだ一週間以上早い。

「なんなんだ。きょうは」

今日こんなに早く学校を出れたのも、教師たちが突然呼び出され、戻ってきて早々に

「全員家に帰れ。」

とだけ短く告げて教室から出て行ったからである。

「まったくよぉ〜突然帰れって言われてもこまるんだよなあ。」

ちなみに京谷は弁当派ではなく、購買派である。

「母さん飯作ってくれるかなあ〜まあいざとなったら自分で作るか。」

その時だった。

「ウウウウウウウウウウウウウウウウウ〜ウウウウウウウウウウウウウウウウ」

突然爆音が近くのスピーカーから流れた。
サイレンだ。

「は？」

「な・・・なんだよ!」

携帯を取り出す。

11時57分

「まだ一時間以上あるのになぜなった?」

「ついに町会も嘘つくようになったのか？」

「待てよ……」

「まさか今つて異常事態？」

でも周りにはまだ人がちらほらといることがささやき声が聞こえてくるのでわかる。

きっと周りの人も今の自分と同じ気持ちなのだろう。

すると突然スピーカーから声が出始めた。

「これはテストではない。外に出ている町民はただちに家に帰って、戸締りをきちんとして、できるならば窓や扉を補強するんだ！ 繰り返し！ ……」

「はあ？」

「マジわけわかんねえよ！」

と言いながらも体は自然と小走りを始めていた。

放送が流れてから10分くらいで家に着いた。

家に着くと何の抵抗もなくドアは開いた。放送を聞いていたとした

らこの状態はおかしい。

（ま・・・まさか変質者がいるんじゃない！）

靴を脱ぎ棄てて猛ダッシュでリビングに駆け込む。

「だれだ！」

京谷は叫んだ。

「だれだ！だなんて失礼ねえ。母さんの顔忘れたの？」

（ん？）

「そうだぞ京谷！突然帰ってきたと思えば第一声がだれだ！とは何だ？」

父さんと母さんがリビングでご飯を食べながらテレビを見ていた。

「あれ？放送はきいてなかったのか？」

「はあ？どうした頭でも打ったのか？」

「京谷。こんな時間に帰ってきたってことはお昼ごはんまだでしょ。」

今作るから待っててね。」

母が立ち上がり、キッチンに向かっていく。

（つんだよ！結局町会が嘘ついてたのか）

はぁーと息を吐きつつソファーに座りこむ。

「なんだ京谷。ため息なんかついて。いつの間にこんな貫禄溢れた爺さんになっちまったんだ？はっはっはっは」

「ちょっと走ってきたんだ・・・帰ってくる途中に。」

「なんだ？ダイエットでもしてるのか？お前の体系なら全然必要・・・」

「ドゴオン...ドン・・・ズルズル・・・ビシャ」

父・京谷・母「??」

「玄関から・・・か？」

「ちょっと見てくる。」

「あなた気をつけてね。最近多いらしいの…不審者が。」

ドスドスつといかにも体格イイですよ？みたいな足音を立てながら
玄関に向かった。

（ガチャ）

「誰ですか？ん？なんだお前血だらけじゃねえか！ほら入れ。ちょっと待ってる！今救急車呼ぶからな。ん　なんだお前力強いなあ・・・
・・・って痛えよ！痛いって。お・・・おいよせ！うわあああがが
あゝばおゝばおお」

「父さん？」

廊下の先に何か見える。何かの塊みたいだ。もぞもぞと黒い塊が動いている

そして鼻をついた臭いは鉄のような匂い・・・

「父さん!!」

地獄絵図のような状態だった。

玄関一面は血に染まり、足の踏み場もなくなっている。

その中心には首筋の肉がごっそりと抉れた塊と白目をむきながら塊に貪りついている何かがいた。

「は！？は？わ・・・わけわかんねえし。な・・・なんなんだよお」

すると塊に貪りついていた「何か」がこちらを見た。

いや、こちらを「見た」という表現は間違っているかもしれない。

なぜならその「何か」は白目をむいて、斜視のように黒目の部分が外側を向いていた。

「ウオオオオア・・・ウオオ」

（なんか・・・やばい！）

一気にリビングまで駆けこんだ。

「母さん！なんか使えそうなものある！？」

「あらー？どうしたのー？父さんは？」

（あ・・・まずい！）

「え・・・あ・・・いや！今さあ訪ねてきた人と話し込んでるみたいなんだ。」

「そんなことはいいから使えそうなものない？」

「例えばどんなの？」

「バットとか何処にしまったの？」

「バット！？どうしたの急に」

「いいから早く！」

「はいはい。あなたの部屋の押し入れの中の一番下の箱に入ってるわ。」

「サンキュー。あ、絶対玄関には行くなよ。父さんが来るなって言ってたから。」

「はいはい。」

自分の部屋に入ってすぐに押し入れをあさり始めた。

（何でよりによって一番下なんだっ！）

「あつた！」

（よし！これがあればなんとかなるか。）

その時だった

「きゃああーあなたどうしたの！？ねえあなた！」

（くそ！何で行くんだよ！）

「あなたなの？この人をこんなにしたのは・・・」

「え…や…やめて近づかないで…やだ…きゃああがあがご
がああ」

（は？今の声って…嘘だよなこんなことありえねえ。なあ！）
途中転げ落ちそうになりながらも階段を駆け降りました。

「あ・・・あ・・・あ・・・」

（今おれの目の前に転がってるのは何だ？なんなんだよおお）

「くそがああああ」

ゴッ、ガッ、ベキッ

「てめえか！？てめえだろ！そうなんだろう？答えろよ。」

数分がたった

「はーはあーはー」

（生れてはじめて人を殺してしまった・・・これからどうすれば・・・）

そこで思考が途絶えた。

なぜならたった今自分が撲殺したはずの「何か」がまた動き始めたのだ。

（ならもう一回だ！）

「人の弱点はやっぱりここだろうなっ！」

強烈な一撃を頭部に与えた。
さすがに動かなくなった。

（な・・・なんでこんな田舎町にこんなゾンビみたいなのがいんだよ！）

「っち」

視線を落とす・・・目に入っただのは数分前まで自分の親だった塊だ。

「うつ!？」

吐いた。涙も出た。鼻水も出た。力が入らなくてしばらくそこに座り込んでいた。

「なんで・・・だよ・・・ってか異常事態宣言は嘘だったんじゃないのかよお」

とりあえず顔でも洗おうと立ち上がった時だった。

ゴソツ と何か後ろで動いた。

「てめえまだ生きてやがっ・・・あ・・・」

「父さん？」

さっき父さんや母さんを襲ったやつみたいな目をしてる。

「と...父さん？」

「ウオオオアウアアオアア」

（父さんまであいつみたいに！しかもあの出血量で立ち上がれるはずがなかったんだ！）

「じゃあ一体？」

「ウオオオオアアアア！」

（父さんまであいつとおなじに・・・じゃあ父さんまで襲ってくるのか！）

「ウオオオオアア！」

「く・・・こそ！」

（やり方はわかっている。頭に強烈な一撃を与えればいい。）

「父さんおれは生きたいんだ！」

（「めん...父さん」）

バガッ

今度は一撃で仕留められた。

（じきに母さんもああなるなら…先手を打つか。）

何の躊躇もなくバットを振り下ろした。

一度風呂に入ってリフレッシュしてから部屋中を調べることにした。死体はそのままにしてある。どうせ異常事態宣告で誰も家からでないであろうと踏んだからだ。

（そついやなんでうちに放送が流れなかったんだ？）

中継機を見ると、電池切れランプが点滅していた。

「は？電池がなくて放送を聞けなかっただけなのに父さんと母さんは犠牲に？」

「……………」

「なんなんだよおおおおお」

バットで中継器を壊した。壊したところで何も変わらないことは分かっている、粉々になるまで叩きまくった。

「ふーふーふー」

(これからどうすりゃいいんだ)

(とにかく友達に連絡してみよう！)

携帯を取り出す。

時間は一時23分

(わずかな時間で俺の家庭が崩壊した・・・くそ！今はまずこれらをどうするかだ。)プルルル！プルルル・・・

「なんだよ！今やばいんだ。後にしてくれないか！」

「お、清水か！良かった出てくれて。突然だが聞いてくれ、時間がない。」

「なんだよ！」

「おれは人を三人殺した。」

「は？」

「知らないやつが突然来て父さんが出たら噛まれたかなんかしたみたいで……」

これまであったことをできるだけすべてを伝えた。
ちなみに清水とは学校で一番仲の良い友達だ。

「お……おまえもか！京谷。」

「お前もかつていうことはまさか！」

「ああ。さすがに俺は殺してはいないが家族全員が「アレ」になった。」

「じゃあお前は今どこにいるんだ？」

「部屋に閉じこもってる。どうやら音を出さなければいいみたいなんだ。」

「……！」

「さつき階段を上ってくる「アレ」に物を投げつけたら当たらなかつたんだがなぜか、物が落ちて行ったほうに歩いてつたんだ。目が見えてたらまっすぐおれのほうに来るとは思はないか？」

「まあ・・・たしかに・・・とにかく今から助けに行く！」

「はあ！？おつとあぶねえこえだしすぎたぜ。まあいい。どうしたんだきゆうに？」

「おれは武器を持ってるし、おれも仲間がほしいからな。」

「やったあ！おつと、俺も早くここから出たかったんだ。」

「一応言つとくが場合によってはお前の親を・・・あとは言わずともわかるな」

「ああ・・・覚悟はできてる。」

「よし。じゃあ今から向かう！」

「おつ！まってるぜ。」

プツ

「さあいくか」

この玄関を出ればもう止まることはできない・・・

（準備はできた）

ガチャ

笹塚京谷は家から出た。

（ほかに仲間ほしいなあ）

と思つてられるのもつかの間だった。

京谷は驚いた。

京谷の家は山のほうにあつて、町全体を大体見渡せるのだが、見限り町全体で同じことが起こつてるようだった。いろいろな場所で煙が上がったり、事故が起きたりしていた。

（清水生きててくれ！）

京谷は再び気合いを入れ直し、坂を下り始めた。

序章 終了

（後書き）

読んでくださった方々全員にお礼と感謝を！（意味はおんなじかな？）

これからもパンデミックとその他諸々をヨロシクお願い致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2801ba/>

エンデミック

2012年1月7日02時48分発行